

聖書：ヨハネ 20：11～18

説教題：神のもとに上る

日時：2018年4月1日（イースター記念朝拝）

キリスト教の暦における2大イベントと言えればクリスマスとイースターということになると思いますが、クリスマスは日本でも当たり前のように毎年盛大に祝われています。これに対してイースターの方はと言うと、ほとんど知られていない、あるいは注目されていないと言えます。最近たまたま見たニュースの中には、卵の消費拡大を狙って卵業界がイースターのイベントに取り組んでいるとか、イオンが今年から「レッツ・スタート・イースター・パーティー」と銘打って、イースター商戦に初めて参入し、定着させようと試みているなどといった話題がありました。なぜそうなのかと考えてみると、クリスマスはそこに本来驚くべき内容を含んではいますが、まだ「赤子の誕生」という点で私たちの日常生活になじみがあり、受け入れやすい面があるのに対して、イースターの場合、「死者からの復活」というメッセージが私たちの日常生活からあまりにもかけ離れていて、どうお祝いしたら良いのか戸惑ってしまうという面があるのかもしれませんが。しかしこの復活にこそキリスト教のグッド・ニュース、福音があると聖書は示しています。そのことを今日の箇所からも学びたいと思います。

大きく二つのポイントで見て行きたいと思います。一つ目のメッセージは「なぜ泣いているのですか」というものです。11節でマリアは墓の外にたたずんで泣いていました。このマリアは1節にあるようにマグダラのマリアという人です。彼女は他の箇所によると、イエス様に7つの悪霊を追い出してもらった人でした。一つの悪霊につかわれていただけでも大変でしょうが、彼女は7つもの悪霊に支配されていた。もはや自分をどうすることもできない、自分をコントロールできない、苦しみの中にありました。そんな彼女がイエス様によって救われ、健やかな者とされた後、献身的にイエス様に仕えるようになったのも良く分かります。その彼女が泣いていました。これは激しい言葉です。彼女にとってイエス様は自分のすべてであり、自分の生きがいであったでしょう。この方に仕えて歩むところに自分の人生のすべての喜びがあった。そのお方を失ってしまいました。その悲しみの中で、せめて最後の葬りをさせて頂きたいと願ってやって来たのに、そのからだがない。昔は遺体が墓に葬られた後、それが敵によって引き出されて、一層の侮辱と辱めが加えられることがありました。マリアはそのことも思ってでしょうか、一層心をかき乱され、激しく墓の前で泣いていたのです。

このマリアの泣く姿は、この世で歩む私たちが最終的に行きつく悲しみを象徴するものではないでしょうか。たとえどんなに素敵な日々を人生の途中で過ごしても、最後にはこういう日が来る。どんなに素晴らしい人と出会い、生きる喜びを深く味わっても、やがてすべての人に訪れる死の現実の前に必ず屈服させられる。大事な人が自分から失われ、その事実の前に何の抵抗もできず、泣きじゃくるより他ない。そんな私たちにイースターは素晴らしいメッセージを語っています。墓の中にいた御使いたちはマリアに言いました。「なぜ泣いているのですか」と。これは「泣く必要はどこにあるのですか」「泣く必要はないのではないのですか」ということでしょう。その後、イエス様も現れて同じことを 15 節で言われます「なぜ泣いているのですか」と。なぜマリアは泣く必要がないのでしょうか。それは一言で言えば、イエス様は復活されたからです。マリアはイエス様を失って泣いていました。かけがえのない方を失って泣いていました。しかしイエス様は失われたものではありませんでした。イエス様は生きておられました！彼女は最初は分かりませんでしたが、イエス様が「マリア！」と呼びかけた時、その声でハッと分かったのです。彼女は振り向いて「ラボニ！」と言います。きっとイエス様を呼ぶ時にいつも使っていた言葉だったのだと思います。そしてその時には、嘆く思いは彼女の心から消えていました。涙はあっても、それはもはや悲しみの涙ではなく喜びの涙だったことでしょう。

これはマリアだけではなく、このイースターの日、あらゆる悲しみのために涙する私たちすべての者に対しても語られている言葉ではないでしょうか。私たちも様々なことのために涙します。なぜそういうことが起こるのか。それは究極的に言えば、私たちに罪があるからです。神が造られた最初の世界には苦しみも悲しみもありませんでした。しかし人間が罪を犯したことにより、様々な苦しみや悲しみがこの世界に臨むようになりました。私たちが日々経験する苦しみには、自分自身の罪から来る自業自得の苦しみがあるかもしれません。あるいは他の人の罪から来る苦しみもあるかもしれません。いずれにしても、それらの罪の結ぶ実が死なのです。私たちは様々な悲しみを経験し、その悲しみが最終的に行き着くところの死を刈り取って、その前にただただ泣きじゃくるしかない。しかしここに、そんな私たちにとっての救いがあります。それはイエス様の復活というグッド・ニュースです。イエス様の復活は単なるイエス様個人の出来事ではありません。イエス様の死は私たちの罪を身代わりに背負って死ぬという性格のものでした。ですからその方のよみがえりは、私たちの罪の精算は今やなされたということ

意味します。私たちを罪から贖うための代価は完全に支払われたということです。ですからイエス様の復活は、イエス様個人のみがえりだけでなく、イエス様に信頼する者たちも同じよみがえりのいのちに生きる者とされることを示すものです。私たちはこの世で生活する中で、様々な悲しい出来事に遭遇します。それらの時に、泣いてはいけないということではありません。泣くのにふさわしい時があると思います。しかしどんな悲しみがあっても、それに打ち勝つ恵みがここにあります。イエス様は今朝、もし私たちが悲しみに心がふさぐ状態にあるなら、同じように「なぜ泣いているのですか」と語っておられるのではないのでしょうか。「わたしを見なさい。わたしはあなたを救うための戦いを成し遂げ、こうしてよみがえったではないか」と言っておられるのではないのでしょうか。多くの悲しみや困難を目の前にしても、私たちはこの復活の主のお言葉を頂いて、もはや泣き続けなくて良い者として、むしろそれらを乗り越えるいのちの祝福を頂いている者としての歩みを導いていただくことができるのです。

イエス様が復活によってもたらして下さったさらなる祝福が17節に示されています。二つ目に注目したいメッセージは「わたしは神のもとに上る」というイエス様のお言葉です。イエス様は17節でマリアにこう言います。「わたしにすがりついてはいけません。」 私は大学生の時、教会学校でこの箇所を劇をしたことがあり、イエス様の役をしていましたが、マリア役の姉妹が私の足に思い切りしがみついたことにビックリして、思わず足で払いのけてしまったことがありました。そしてこのセリフを言わなければなりません。「わたしにすがりついてはいけません。」 随分と厳しいイエス様！果たしてイエス様はこんな調子だったのだろうか。きっと違っただろうなあと思ったという苦い思い出があります。果たしてイエス様はどういうニュアンスでこの言葉を語られたのでしょうか。イエス様はその後に続けてこう言われました。「わたしはまだ父のもとに上っていないのです。」 ここは実は解釈の難しいところです。大きく二通りの解釈があります。一つは、わたしはまだ父のもとに上っていないのだから、今手を離したら、もうチャンスがなくなるかのようにわたしにしがみついている必要はない。それよりも今は早く弟子たちのところへ行って、この知らせを伝えよ！という意味です。もう一つの解釈は、この時のマリアのイエス様へのすがりつき方は正しくないことをイエス様がやさしく叱責されたと見る見方です。イエス様はこれから天に上って行こうとしています。そうしてこそ私たちの救いは真の意味で完成します。なのにそのイエス様にしがみついて地上に引き止めておくようなかき抱き方は正しくない。学者たちの意見は分かれています、どちらが正しく、どちらが間違っていると簡単に言うことはできない

ようです。しかしイエス様がこの17節ではっきり示しているメッセージは、「わたしはこれから神のもとに上る」ということではないでしょうか。ここに私たちがこの日、心に留めるべき大事なメッセージがあると思います。それはイエス様の復活はこの世への復活ではないということです。イエス様は地上の生活に戻って来られて良しとされたのではなく、天にいる神のもとへ、父のもとへ、上って行こうとしています。それはとりもなおさずイエス様を信じる私たちをそこに導こうとしておられるということです。つまりイエス様がこの復活によって私たちに与えてくださる祝福は、天へと向かう性質を持つということです。天的生活への復活です。ですから後に見ますように、私たちは地上的なものにしがみつくなりべきでないこととなります。

そしてさらにこの祝福が17節後半にこう記されています。「わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」すなわち天で私たちに用意される生活とは、「神の家族としての生活」であるということです。ここにある素晴らしいメッセージは、私たちはイエス様と結ばれて、何とイエス様が天の父なる神の前に持っているのと同じ身分、同じ立場、同じ特権に引き入れられるということです。もちろんイエス様と私たちとの間には区別があります。イエス様は永遠の昔からの一人子であるのに対し、私たちはイエス様と結ばれて、言わば養子として神の家族に迎えられた者です。しかし当時の世界において養子は、実の子より低い扱いを受けることはありませんでした。同じ子の身分にある者として同じ祝福を受けました。聖書もそう述べています。驚くべきみことばの一つは、ヨハネの福音書17章23節で、イエス様のご自身の民をとりなす際にこのように父なる神に向かって祈られたことです。「あなたがわたしを愛されたように、彼らをも愛されたことを、世が知るためです。」神様の御子キリストに対する愛は永遠の昔からの限りない愛です。誰がそれを計り知ることができでしょうか。ところがそれと同じ愛で、神は御子と結ばれた私たち、養子として神の家族に迎えられた者たちを愛しておられるというのです。その愛の中で、私たちは神を「私たちの父」として持ち、またこの偉大な父に守られ、配慮され、ふさわしい訓練や懲らしめを設け、その豊かな交わりに生かされるのです。私たちはイエス様を信じて、今すでに神の子どもとされていますが、やがての天の御国において、その究極の祝福を味わいます。キリストとともに神の共同相続人となり、主イエスを兄上として、神を私たちの父とする、神の家族のこの上ない祝福と交わりの中を歩む者とされるのです。

このことを覚えて、私たちはこのイースターの日、心を高く上げることへと導かれるべきではないでしょうか。先に招詞でコロサイ書3章1～2節を読んでもいただきました。「こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。」 イエス様はこの世の生活へと復活されたのではなく、天に向かって復活されました。それは私たちをもそのように導くためです。とするなら、私たちも地上のことではなく、天にあるものを思い、これを追い求める生活をすべきではないでしょうか。これはもちろん、この世のすべての活動から引退して世捨て人になるということではありません。私たちはやがての日までこの地上で生きます。ここでなすべき働きや責任があります。ただこの世で生きる上でも、地上の過ぎ去って行く事柄に心を奪われて生活することをしないということです。私たちはやがてこの世を後にし、天のいのちへと入って行く者たちです。そのことを信じる私たちが、どうしてやがては消え去るこの世の事柄のために一生懸命になって、自分の貴重な地上の人生をささげるべきでしょうか。それらはやがて消え去るのです。価値がなくなるのです。そういうことに時間やエネルギーや財を消費していても、結局、何の意味もないのです。むしろ私たちは天に入る者として、今やいつまでも続く永遠に価値あることにだけ関心を持って歩むべきではないでしょうか。それは神の御言葉に耳を傾け、神の価値基準に沿って歩むことでしょう。神が喜ぶことは何かを知り、神の御心が行われるために、召されたそれぞれの場所で天に属する民としての生活をして行くことでしょう。

このイースターは私たちの生きる目標を大きく変えるものです。私たちの人生は、ただこの世で生き、この世で死ぬためだけのものではありません。私たちはキリストにあって死を乗り越えて生きる者、いやただ死を乗り越えるだけではなく、天に向かういのちに生きる者とされました。イエス様はこの日に復活され、神のもとへと上り、私たちがやがてそこへ進むための道をつけてくださいました。私たちはこの世を後にし、天の御国でイエス様にあって神の家族としての歩みをします。このような祝福がこのイースターによって備えられたことに私たちは改めて驚き、感謝し、また大いに喜びたいと思います。それゆえ地上のものを思わず、上にあるものを求め、それこそを追求して歩みたい。どんな悲しみと涙の中に今あっても、イエス様は私たちを復活のいのちに生かし、天の父のみもとにある、より高い、祝福された生活へ導いてくださいます。そのことを告白して、天にしっかり目標を定めて生活し、また私たちをこのように導いてくださる

父なる神と主イエスを証しし、人々をこの恵みへ招く主の民の歩みへ進みたいと思います。